

魔法騎士冒険譚ルチエリールタ

【第11話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

ルチエリールタ：騎士団長

チビィ：魔族

シャーザベスラ：ヌノ皇女

シャーニューニダ：魔族

ニユンリン：魔族

嵐宮芽里：夕杜王女

浮世心愛：五龍

アルノ・ヨナ：ポストゼランガロニア

王女

ワウー：犬

ムニ：ミニマ族

エリシア・ローズ：メカルド女王

シローリ：踊り子

マウ：ゼットシグマ構成員

リチャクラオン（51）：アルデスナ

国王

ファイル：アルデスナ王子

ヒュール：情報屋

ゲドーナ：ゲドン族首領

ミニマ族

ムジート族

○聖地メカルド・外周の道

どこかの空に浮かんでいる、巨大な島。
その道に、ルチェリールタが倒れて
いる。

ルチェリールタ「う、うーん……」

ルチェリールタ、ゆっくり起き上がる。

ルチェリールタ「ここは……？　船で寝たは
ずじゃあ？」

ルチェリールタ、あたりを見回す。

そのまま、歩き始める。

ムニの声「あ、いた！」

ルチェリールタが振り向く。そこには、
ふよふよ浮いているまんまる魔族ムニ
がいる。

ルチェリールタ「チビイ……？　にそっくり」

ルチェリールタ、ムニを眺める。

ムニ「わたしはムニ、ミニマ族っていう魔族」

ルチェリールタ「きいたことない種族名だ……」

……

ムニ「それで、ここは聖地メカルド。とりあ

えず、あなたを女王様に会わせたいから来て！　いま、聖地メカルドが危険にさらされてるの！」

○王都メカルド・入口

入口を通ると、たくさんのミニマ族が視界に映る。

ルチェリールタ M 「え、なにこれなにこれ！
チビイがいっぱい超かわいいんだけど
！」

ルチェリールタ、心の中でほっぺに両手をあてている。

ミニマ族 A 「え、もしかしてニンゲン？」
ミニマ族 B 「ニンゲン！　エリシア様が探してた英雄？」

ミニマ族 C 「やったあ！　英雄だ！」

ルチェリールタに集まってくるミニマ族たち。

ルチェリールタ 「ちよちよつと、近すぎ！
英雄ってどういうこと！？」

ルチェリールタM「か、かわいー！ 全員

ぎゅーってしたい！」

ルチェリールタ、心の中でミニマ族の
かわいさに悶絶している。

○メカルド城・王座の間

周りを見渡すと、視界に入る王座。そ
こに、華やかなドレスに身を包んだエ
リシア・ローズが座っている。

エリシア「ようこそ、聖地メカルドへ。私は
エリシア・ローズ。王都メカルドの女王よ。
ふふっ、なんだかよくわからないって顔し
てるわね」

エリシア、ルチェリールタに笑いかけ
る。

エリシア「早速本題に入るわ。ここ夢の世界
はね、メカルド1つを残して邪神の獣に侵
食されているの」

ルチェリールタ「邪神の獣……ですか？」

エリシア「ええ。だから、英雄を見つけて邪

神の獣を倒さなきゃいけない。だけど、残念ながら邪神の獣は今の私じゃ倒せない。

私は、現役を退いてしまったから」

ルチェリールタ「現役？」

エリシア「全盛期ってことよ。私も、このとおり魔法が使える」

エリシアの目の前に、身長より大きな

氷が出現。

ルチェリールタ「つ、強……この魔素量。これで現役じゃない？　すごい」

エリシア「こっちに来て」

エリシア、優しく手招きをする。

ルチェリールタ、ゆっくり丁寧に歩いてエリシアの前へ。

エリシア「あなたはまだ英雄になってないわね。神を救って英雄になったら、またここに来てちょうだい」

エリシア、ルチェリールタに手をかざす。

○ 船・個室（朝）

ルチェリールタ「うわっ！」

ルチェリールタ、ぱっと目を開ける。

ニユンリンが、一緒にベッドでルチェ

リールタに抱きついている。

チビィ「お、起きたか！」

ルチェリールタ「まだニユンリンが寝てるんだけど、ほら」

ルチェリールタ、ニユンリンを指さす。

ニユンリン「あーしは起きてるよー！」

ニユンリン、飛び起きる。

ルチェリールタM「なんだったんだろ、メカルドって」

嵐宮芽里「ついたみたいです。抱き合ってるのもいいですが、そろそろ行きましょう」

○ 砂漠

T「アルデスナ共和国」

風が吹いて、砂が舞っている。一行、砂漠を歩いている。

ところどころにテントと人が見える。

チビィ「こんな砂漠移動しなきゃいけないのかよ！　つたく、ここまで何日もかかったじゃないか！」

※ ※ ※

（フラッシュ）

テントにいる人に話しかけている一行。

※ ※ ※

チビィ、シャーザベスラに抱きかかえられ、水の中でぷるぷるしている。

シャーザベスラ「ああ。みんな気を付けて、砂が目に入らないように」

芽里「この国はゼットシグマと呼ばれる組織が暗躍していると、風の噂で聞いたことがある」

アルノ・ヨナ「気をつけるのヨナ」

ルチェリールタ「いたた……」

ルチェリールタ、腰に手を添えて体を逸らす。

シャーザベスラ「やりすぎ注意だぞ、くれぐ

れも倒れるなよ」

ルチェリールタ「え、その……もう完全にバ
レてるし……」

ルチェリールタ、全員からじつと見ら
れる。視線を逸らして顔を赤らめる。
ニユンリン、ルチェリールタにくつつ
く。

○ゼラン王都・入口

芽里「ここがゼラン王都です」

チビィ「なんかポストゼランガロニアみたい
な名前だな」

一行、入口を通る。

○ゼラン王都・街中

中は、人間と魔族たちがにぎわいを見
せている。

何かの祭りが行われそうな雰囲気。

民衆「あれ、王女様じゃないか？」

民衆、一行を見てざわざわしている。

民衆「つてか、あの人のおっぱいでかかない？」

ニユンリンの胸が視線を集めている。

ルチェリールタ「あの、これって何かの祭りですか？」

女A「ああ、祭りが行われるのよ。エリシア様っていう人が龍に祈りを捧げるの」

ルチェリールタM「えっ！ エリシアってが夢で見た……実在するってこと？ それとも人違い？」

女A「迷いごとがあつたら龍が聞いてくださるのよ。ガセルヴル・ローゾヴァ様が！」

ルチェリールタ「それって五龍って言われているあの？」

女A「そう！」

ルチェリールタ「そうなの？　じゃあみんなで行ってみようよ！　シャーニユーニダのお兄さんとか居場所わかるかも！　祭りだつたら楽しそうだし！」

ルチェリールタ、目を輝かせる。

シャーザベスラ「……そうか。ま、行ってみるのもいいんじゃないか」

シャーザベスラ、真顔で返事する。

チビイ「やったぜ！　そんで、クレーディーの行方も聞こうぜ」

ルチェリールタ「そうだね、見つかるといいね」

その様子を遠くから見ているヒュール。

○ホテル前

目の前に、大きなホテルがそびえ立つ。

ニュンリン「こんなものが砂漠にあるの？」

芽里「うる覚えですが、昔とある技術者のムジート族が技術と金を出したと聞いています。とてもすごい方なのでしょうね、技術と金以上のことをなすとげるとは」

一行、ホテルを見つめる。

○ホテル・受付

チビイ「なんかけっこう魔族が見えるよな。」

普通はあんま街中で多く見ないのに。ほら、魔族の受付だぜ」

チビイが示した方向に、ムジート族の受付が立っている。

ルチェリールタ「この人はムジート族っていう賢い魔族。だからこの国の学力が高いの。必然的に人間社会に溶け込める者も多い。まあ、この受付さんは魔族態だけど、魔族が人間態になるのは超むずかしいから、シヤーニューニダとニュンリンは稀に見る上位魔族だよ」

チビイ「おいルチェリールタ、さっきから情報多すぎてなんか頭がパンクしてきたぜ」
ルチェリールタ「ごめんごめん。とにかく、この国はめっちゃ魔族が賢くて、ニュンリンとシヤーニューニダは超すごいってこと」
ルチェリールタ、チビイをなでなでする。

ニュンリン「えへへ、褒められたあ。うれし」

ニュンリン、嬉しそうな表情になる。

一行、受付を済ませる。

受付「はい、では階段をあがってお部屋へどうぞ。外からお越しでしたら、砂を落とすためにシャワーをおすすめいたします」

シャーザベスラ「そうだな、疲れたから今日はホテルで休もうか」

○同・個室

チビイ「シャーニューニダ1人だな、風呂」

シャーニューニダ、部屋を出る。

ニュンリン「ルチェリールタ、風呂行こ！」

ルチェリールタ「あ、うん……」

ルチェリールタ、頬を赤らめる。

芽里「行きましょう、心愛」

心愛「そうじゃのう。チビイとワウーはここで待っておれ」

チビイ「おう！」

チビイとワウーを残し、女子組、外に出る。

ワウー「わん」

ワウー、ルチェリールタのバッグにすりすりしている。

チビィ「おまえ何してんだ？」

ワウー「わん！ わん！」

チビィ「このマナライト3つに反応してんのか？　　そういやおまえ、マナライトに反応する犬って言われてたよな」

○同・廊下

ヒュール「さてと。行くとするか」

銭湯の入口を見つめるヒュール。

○男子風呂・更衣室

シャーニューニダ、着替えている。

マウ「あ、あなたもしかして特異点の教祖様でしょうか？」

男、シャーニューニダに声をかける。

シャーニューニダ「ん？」

マウ「僕はマウ、ムジート族。教団ゼットシグマの者なのですが……」

シャーニューニダ M「何、ゼットシグマだと？
芽里が言っていたゼットシグマか？

教祖：…とはどういう意味だ」

シャーニューニダ「知らないな。悪いが他をあたれ」

マウ「失礼しました：…」

マウ、申し訳なさそうに大浴場へ入っていく。

○女子風呂・銭湯

シャーザベスラ「広いなあ」

芽里「よい雰囲気です」

芽里とシャーザベスラ、女子風呂を眺める。

ヨナ「体流すのヨナ」

ニユンリン「ほらルチェリールタ、体洗いに
行こ」

ルチェリールタ「あ、うん」

6人、洗い場へ移動。体を洗い始める。

ニユンリン、ルチェリールタの体に泡

をつけてなでていく。

ルチェリールタ「あんっ」

ニユンリン「え、なでてるだけだよ」

ニユンリン、ルチェリールタの胸を揉みしだき、股に指を這わせる。

ルチェリールタ「あっ！ あんっ！ あんん

っ！ イっ！ イク！」

ルチェリールタ、口を押さえながら体をビクンと震わせる。

シャーザベスラ「おい風呂でするな」

ルチェリールタ「あんんっ！」

シャーザベスラ「やめろって」

ニユンリン「（得意げに）あゝ！ もしかして、ちっばい気にしてる？ あーしサキュバスだし、おっぱいおっきいもんね！」

シャーザベスラのちっばいを眺めるニユンリン。

シャーザベスラ「な、そんなわけないだろ！」

シャーザベスラとニユンリン、胸を押し付けあう。

シャーザベスラ「あ……」

シャーザベスラ、悲壮な顔になる。

シャーザベスラ「（涙目で）ううっ……うう

！ 僕ぺちやばいじゃないもん……ないもんっ！」

そう泣いていると、

シローリ「え、もしかして王女様たちですか？ また見かけるなんて！ 他国の王女様たちが祭りに参加を？」

突然 6 人に話しかけてくるシローリ。

ルチェリールタ「あなたは？」

シローリ「私はシローリ、踊り子をやっています。翔龍祭にも舞を踊る役として参加をするんです。王女様。皇女様たちに会えるなんて、とっても光栄です！」

ルチェリールタ「私はルチェリールタ、魔法王国ヌノのラフドナ騎士団長です」

シローリ「ぜひお越しになってください！ 街で見かけたのですが、ぜひあの、とってもかわいいまんまるちゃんも連れてきてく

ださいね！ ステージにあげてぎゅーって
してみたいです！」

ルチェリールタ「そうですか、チビイも喜ぶ
と思いますよ」

シローリ、軽くお辞儀をしてきびすを
返す。

○ホテル・個室

女子組、扉を開けて部屋へ入室。シャ
ーニューニダ、座っている。

芽里「では、次の日程をおさらいしまし
ょうか。まずは王子を仲間にしに行きます
が、その前に翔龍祭に参加してみてもいい
でしょう」

チビイ「やっぱ宿泊施設は秘密会議がやり
やすいな、そういうところで秘密会議する
ことが多いぜ」

チビイ、ぷるつと震える。

芽里「ところでシャーザベスラ、どう
したんですか」

シャーザベスラ「うう……」

涙目のシャーザベスラ。

シャーザベスラ「ニュンリンが僕のおっぱい
バカにしたあっ……ちっばいって言われた
あっ！」

そう言いほか女子5人の胸を眺め、自
分の胸と見比べる。

シャーザベスラ「みんなおっきい……僕だけ
ちっばい……ふえええええ！　びあああ
あああああああ！」

シャーザベスラ、大泣きする。

芽里「もう、シャーザベスラは相変わらず泣
き虫ですね」

ニュンリン「な、なんかごめんね……」

なでようとするニュンリンを、

シャーニューニダ「あ、そうだ。皆に共有す
ることがある」

芽里「なんでしょうか」

シャーニューニダ「さつき、マウと名乗るム
ジート族が我に接触してきた。そいつは教

団ゼットシグマの一員だそうで、私のことを教祖と呼んでいた」

芽里「なぜあなたを教祖と？」

シャーニューニダ「さあな。ただ、我がムジート族だから誰かと間違えたのだろう。もし私の兄と間違えていて、兄がここで見つければいいんだがな。そう都合よく事は運ぶまい」

シャーニューニダ、魔族態に変化。

シャーニューニダ「この姿を見せたのは初めてだな」

すぐに人間態に戻る。

○同・個室（夜）

寝る準備をしている一行。

同じベッドのルチェリールタとニュンリン。布団がもぞもぞ動いてベッドがギシギシ音を立てている。

ワウー「くーん」

ワウー、チビイにすりすりしている。

チビイ「なんでかわかんないけど、悪い気はしないな」

芽里「ふふっ。とても微笑ましいやりとりですね。さ、寝ますよ…：相変わらず2人はお盛んですね。夕杜でも、これくらいの多様性が認められればいいのですが」

芽里、もぞもぞ動く布団を見てから部屋
の明かりを消す。

ニユンリン「ルチェリールタっ！」

ルチェリールタ「ニユンリンっ！ ふ、太いっ！」

ニユンリンの男性器が、ルチェリール
タの女性器に出し入れされている。

ニユンリン「あ、出ちゃうっ」

ルチェリールタ「いいよっ！ あんっ！」

ルチェリールタ「あんっ！ イク！ イク！」

ニユンリン「あ、あーしもっ。イク！ 出る

！ イク！ イっイク、イク！ イクっ！」

2人、体をびくつとさせる。

ニユンリン「あ、あーしなんかでいいの？」

ルチェリールタ「人魔共栄論あるし、私も思うからいいの。これは邪な気持ちじゃないからね」

2人、静かにキスをする。

○巨大飛行物体・司令室

ゲドーナ「そろそろ、奴らの戦力が整う前に叩いた方がいいかしら」

神妙な表情になる。

ゲドーナ「ローレ・レドニクスからもらったこの闇の力……」

○ゼラン王都・祭典会場（朝）

たくさんの人ばかりでとても賑わっている会場。ほぼ全員が、ステージのシローリ、エリシア、リチャクラオン（51）、ファイルを見ている。

ルチェリールタM「夢で見たエリシアさんと同じだ……」

ニュンリン「ね、楽しもうね！」

ニユンリン、互いの胸を押し潰すようにルチェリールタに思いっきり抱きつく。

シャーザベスラ「こんなところで何してんだ！

ニユンリン、僕へのあてつけか！？」

シャーザベスラ、小声で叫び涙目ではつぺをふくらませる。

芽里「2人ともほどほどに。そろそろ始まります」

芽里がそう言うと同時に、

シローリ「みんな、今日は集まってくれてありがとう！」

シローリが民衆に向かって手を振る。

民衆、声をあげる。

リチャクラオン「我が国王リチャクラオン！

さあ、翔龍祭の開幕だ！」

ファイル「俺たちに舞を捧げよ国民たちよ！」

エリシア「さあ、始まりだよ！」

民衆たち、エリシアとシローリに合わせ踊る。

ヨナ「芽里、シャーザベスラ」

シャーザベスラ「わかってる」

芽里「準備はできています」

王女たち3人、目配せをして頷く。

シローリ「それじゃエリシア、いくよ！」

エリシア「うん！」

シローリとエリシア、ファイルに向けて
素早く手をかざす。ファイルに向かって
エネルギー弾が飛んでいく。

直後、ステージが爆発する。

チビィ「な、何が起こったんだ？」

ルチェリールタ「わかんない！　くそ！　反

応遅れた！」

煙が晴れ、リチャクラオンを守るよう
にステージに立つシャーザベスラ、芽
里、ヨナ、ファイルの姿が現れる。それ
ぞれ順に水、雷、氷、炎の魔法を纏っ
ている。

ファイル「やっと来てくれたか……お前たち」